

巻頭によせて



校長 北村 聡

Kitamura Satoshi

司馬遼太郎の「坂上の雲」が、テレビでも昨年迄3年にわたり放映されるなど評判になりました。そこに描かれたのは悲惨な戦争の様相でありましたが、物語を貫くのは明治時代の若者達の、明るい未来を信じて国家のために突き進む頼もしい姿であり、明治という時代をどちらかというとも明るいイメージで捉えた空気です。無論そういう側面があってその後の国家発展の礎が作られたのは間違いありません。しかし、司馬遼太郎自身も語っているように、明治という時代は、現代に生きる我々から見れば、多くの人々が貧困や病気、人間関係の複雑さの中で苦しみに耐えていました。

樋口一葉の作品に「十三夜」という短編があります。これは、密かに心を寄せる幼なじみの男性がありながら、求められて身分の高い裕福な家に嫁いだ女性が、子供が生まれた後、夫からうける侮蔑に苦しみ、悩み抜いたあげくに実家に帰って離縁を相談するが、両親に諫められてやむなく嫁ぎ先に戻るという話です。子供の将来、両親のこと、弟の出世などの縛りの中で、やむなく「私さえ死んだ気になれば」と諦め、戻ります。帰りの人力車の車夫が、偶然かつて思いを寄せた男性で、しばらく語り合いながらも、互いの幸福を願いつつ別れ、十三夜の月明かりに消えるというお話です。

現代に生きる我々も形こそ違え、価値観の多様化の中で困難に苦しみます。政治や経済の混乱に加え、災害や原子力発電所事故による汚染の恐怖、学校、職場の人間関係や家族の事など、様々な苦難が次々とやってきます。困難に遭遇した時には、決して短絡的に考え、性急な行動をとるのではなく、思い切って頼れる人に相談し、落ち着いて考え、心を決めることが出来るように努力したいと感じます。そして、生きて在ればまた楽しいこと、充実感を味わうこと、周囲の人々に感謝できることがやってきます。どうか皆さんはそれぞれが両親に呼ばれてこの世に来たことを大切に、一日一日を過ごしてほしいと思います。

うららかな春風の中、「不撓不屈」を胸に、生きて在ることの有り難さを思いつつ、決して絶望せず、互いに生きてゆければとあらためて感じる今日この頃です。